

---

# 花子とモンスターズ

目田日

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

花子とモンスターーズ

### 【NZコード】

NZ8361Z

### 【作者名】

目田田

### 【あらすじ】

何が起きたか、目が覚めればそこはモンスターの跋扈する大陸。唯一意思の通じる俺最強！な相棒に引きずられながら、逃げ足だけは早い女子大生主人公が逃げたり、ボケたり、ツッコミしたり、モンスターとの相互理解に苦しんだりしながら冒險し、女版ターザンへと逞しく成長してゆくのか？そんなお話になる予定。

## アイアムジャパンーズガール

サークルの新歓（新入生歓迎会）だつたんだよ。朝方までカラオケでワーウー馬鹿みたいに騒いで、足もとの先輩がアパートまで送つてくれて。

部屋に帰つて、入学式と合わせてまだ一度しか着てないスーツを脱いで、発展途上にある下手くそな化粧落として、うとうとしながら歯を磨いて。

起きたら風呂を済ませようと思つて、ベッドに飛び込んだんだよ、うん。

そうなんだよ。多分、帰つた筈なんだよ。

筈なんだよ、筈なんだよ、筈なんだよ……（フュードアウト）。

…「じこはまじこ」なの。

山田花子やまだはなこ、これからますます膨らむであろうキャンパスでの新生活に胸を躍らせ続けていた18歳。おとめ座の乙女、B型。

いきなりですが、乾いた風の吹く荒野からどうもここんこちは。

じちら前後左右、見渡すかぎり赤茶色の岩山だらけ。天は雲一つなく快晴そのもの。岩陰に避難しているのですが、気温は真夏のようになくて、さつきから汗がボタボタ垂れています。そして、人の気配はなし、と。

見慣れぬ荒れた大地にて、私、ぽつんとパジャマ一つで素足。場違い感、アウエイ感、共に絶好調。どうやら現在、遭難中のようです。

「…アメリカ？ステイツ？ウエストサイド？」

モニコメンツバレー ウエスタン映画で見た光景に近いから、アメリカ西部だと思うのだけれど。

一体何の目的があつて一般善良市民の私をここまで拉致したんだ  
る？、謎のカルト組織は。

否、テロリスト集団か。はつ一まさか、どいかの工作員と間違え  
られたとか…… 映画の見過ぎか。

しかしジックリや悪戯にしてせ、やり過ぎだよなあ。

.....。

そうか、なんだ、夢だったのか。

傍にあつた硬度が高そうな岩に額をぶつけでみる。痛い。当たり  
前だよね、ぶつけたんだから。

念のためもう一度。やつぱり痛い。

おうおう神様、やつぱり夢じやないのかい。そうなのかい。

努めて冷静でつづとふぞくしてみていくけど、これが現実、だと  
したら、かなり、怖いことだぞ。

まあどうやつたら帰れるだろ？

道路や轍、電線や石油のパイプ一つでもあれば、その先にある機  
関や施設を期待して、沿つて歩くことも出来たの。

あるいは自然に均された砂利に、3~4メーターほどの岩々と、  
侵食されて芸術的な形になりながら連なる岩丘と、ちよ、ちよ、ちよ、

点在する枯草だけって、どういうことなの。ねえ。

コレが噂の放置プレイというやつか。いまどきの放置プレイって世界規模の域に達してるの?流行ってるの?流行らせてたまるかテメエこの野郎馬鹿野郎。

飲み物は?食べ物は?

川も池も何もない。枯草じゃなくて青々とした植物の一つくらいあってもいいのに。どうやって食べるかは置いて、サボテンも無いなんて、どないなつとるんかい。ここ西部劇とちやうんかい。

……違うよな、うん。映画はフィクションだ。

自力で歩くにも限度があるよね。水も持たずに炎天下のなか、水平線の向こうまで続いてそうな荒野で、人里を探し歩く体力はない。無いったら無い。ミイラ化してまうよ。

とすれば、誰かに見つけて貰うしかない訳ですよ。

飛行機、ヘリコプター……こんな岩ばつかの所で私が分かるのかな。最近のは速いし、よっぽど注意しないと見落とされそう。それ以前に口々を通るのかな。

あとはアレだ。不法入国者を感知する機能とか人口衛星にないのかな。あんだけシャトル上げてるんだし。……いや、無いな。アメリカかじや不法入国者なんてキリがないよね。

オイオイオイ。

どうやって生き延びれと。神様、あんまりだよ。餓死プレイなんて。

「……誰か——!——いませんか——!——お——い——!——ヘルプミー——!——ヘ——イ——!——アイアム、ジャパニーズガ——ル——!——」

しーん。山彦さえ帰りやしないなんて。静かちゃんですね。私一人といふことですか。

これは…寂しいなあ…。

……………。

うわ、うわわっ。いやだ、この状況で一滴だつて水分無駄にしちゃうのに、ダメだこれ、やばい、泣く。鼻水出てきた。怖い、怖いよ、これ。怖い。どうしよう。怖い。夢なら覚める、覚める、覚める、覚める…。

悲しむ間もなく

ずびずびと鼻を啜りながらパジャマの袖を涙と鼻水で濡らしていくと、なにやら、もぞもぞと動くものが視界に入った。

不思議に思いながら、滲む視界を払うために手をぐりぐり拭う。モリモリモリモリと、5メートルほど先の土が元気よく盛りあがつて塚ほどの小山が出来ているじやありませんか。

何じいぢま。

モグラ？ ！ こんな所で？ え、 テカ過ぎじゃないの？ と首をかしげながら恐る恐るそのまま様子を伺つて居るが、 そこから生き物が勢いよく土を飛ばして顔を出し…… \* ¥ @ ツバメ（声にならない叫び） ! ! ! ! ! !

十の中から一人にあれば。

それはミルキーなカラーリーをした  
超自然界虫（指定彫刻1ノ1）  
ル）だつた。

優しい色合いとは裏腹に、ぐちやぐちやとしていかにも「身体器官です」と主張する肛門に似た口が、ぐばあ！と開かれた。芋虫という外見にそぐわない立派な牙が、ぎらりと光る。と、同時にビチヨビチヨと凄まじい量のヨダレが辺りに飛び散った。

反射的に上げてしまつた叫びに反応して、キシャアーと高い声を上げた超巨体芋虫は、土から巨体をものともしない早さで這い上がりつてくる。まるで蛇のような動きだ。

私の第六感は告げている。今のキシャア！は「飯見つけたぞオ！」

「、だと。飯とは何のことだ。いや、誰のことだ。普通に考えて私のことだよバカヤロー！」

全速力で逃げだした私に、超巨体芋虫が素早く後を追う。キシャアアア！大地が震えるような咆哮を合図に、食物連鎖のレースが始まった。

「うわあああ————つ！ ハア、ハア、来ないで来ないでええええ————！」

「キシャア！」

「『待て』……だと!? バカ言うな、待てるか、こなくそ——つ——！」

しつこく追いかけてくる超巨大芋虫（推定全長10メートル）はまだ余裕、依然として速度は緩まず。対して被食者山田花子選手、既に限界、気力のみが頼りの状況だ。

ジグザグに走り、腐るほどある岩々を利用して、ぐりにか凌いでいるが、暑いしもう保たない。鬼ごっこ逃げ役は得意なほうだったんだよなあ。えへへ…じゃなくて！

このままじゃ、あのグロテスクな口でスナック菓子のよひにムシ

ヤムシヤ

嫌たああああああああああああああ！！！

「キシイツ！」

ハア、ハア……わつ、わつ！

ぬるりとしたもので足が滑り、派手に身体を地面に打ち付ける。  
うおおおお何で滑ったああああ！！？……液体？……こりや唾液だ  
！奴のだ！奴がここまで飛ばしたんだよお！  
転んだ痛さを堪え忍び、匍匐<sup>ほふく</sup>前进で何とか進もうとするとき影が差  
しこんだ。

機械のようにきこちなく顔を上げる。目前で超巨大芋虫が私を見下ろす。

ミタレか私の手の上にホトトギスが落ちてきた……シリサズ

もうダメだ……」と思いつつ、ぐうぐうと呟く。

私は大の字に仰向けになり、目を閉じた。

お父さん、お母さん、それから妹よ。先立つ不幸をお許しください。花子は芋虫の餌になります。いいえ、聞こえは悪いですがただの芋虫ではありません。やんごとなき芋虫の餌になるのです。きっと神妙な侵食者とともに、現住民の方達に神聖視され、祭られていたことでしょう。

ああ、願わくは。  
死ぬ前に素敵な恋をして、  
そこそこな彼氏が欲  
しかつたです…。

ぬるりと何かが、擦り剥いて破れたパジャマから怪我の部分を伝う。ああ、食われるのか。ぞくりと、鳥肌が立った。

「キシー」

「意外と美味しいな」じゃねえええ！ちょ、ちょ、ちょっと、ねえ、なんで舐めてるのオ！？

あれ…？

「ひーーー…やめ、やめてーー…ゾワゾワするうううー…」

チュバチュバチュバチュバチュバ…。

と、鳥肌が止まんないよお！大事な何かが削られているような気がしてならない。いや、それより細菌感染とか寄生虫とか大丈夫なのがこれ。なんか凄いパジャマの下がベタベタしてるんだけど、手遅れなのか。…といふかいつまで続くんだろうか、これ。誰か早く何とかしてくれ！

チュバチュバチュバチュバチュバチュバ…。

漸く続いていたなぶり舌がピタリと止まり、離れた。や、やっと食べつ気になられましたか、旦那。

ビクビクしながら強く目蓋を閉ぢして、その瞬間を待つ。待つ。ひたすら待つ。

長い。

なんだどうしたトイレかと田を開ければ、足元にビル五階分はありそうな超巨大な白い繭が構えていた。おやまあ、白い繭とな。…あれ？芋虫様どこ行つた？

キヨロキヨロと辺りを見渡しても居ないし、土を掘つたような形跡もない。もしかして、もしかしなくても、この繭なんでしょうか。大きさが相当というか、ミルキーな色も…いや、もう、これだろ。これしか無いでしょ。

「…………はつ…コレは逃げるチャンスー！」

繭＝動けない。変態中つて一度ドロドロに身体が溶けるんだつけ

か。

すぐさま起き上がり、繭に背を向け、ダッシュ。あれ？足が踏み出せな……何じゃ『らああああああああ……？糸おお……？

いつの間にやられたのか、両足首を覆い隠すように糸が巻かれている。長大で、柔らかいのに信じられないくらい強硬だ。その出でこやはやりといふか、繭だった。

「ふぬぬぬぬ——つ……」

奥歯を噛みしめ、全力で一步を出そうとしているけど。ダメだ、全然先へ進めないし千切れれない。

変態中も尚逃がさぬと言うのが貴様は。チユバチユバは味見だつた訳なのか。私を変態後の食料にするつもりなのか……。変態つてエネルギー使いそうだもんなあ……。知能高そうだなあ、この芋虫……。

日は傾いて、おやつの三時といったところか。1日で一番暑い時間帯じゃないの。体力はとうに限界。今立っているだけで、筋肉がピクピク震えている。喉が渴いた。汗臭い。途方に暮れた私は、大人しくその場に座り込み、恐らくとんでもない姿になるであろう、芋虫変態後のクリーチャーを想像した。

ウルト○マンに退治されそうな怪獣しか想像できない。出来ればファンシーで可愛い、てふてふになつて欲しい。

ぐりゅりゅりゅ。うーん、腹の虫がおさまらないよ。お腹と背中が、くつつきそうです。喉も渴きすぎで、だんだん意識が朦朧としてきた。ヤバいな。

「お腹すいた… のど渴いた…」

…そして寒い。汗で冷えたのもあるだらうけど、やつぱり日が暮れて、この周囲の気温が急に冷えたことが大きい。こりゃ食われる前に死ぬな、私。

もぞもぞと足に巻き付いていた糸が解かれた。逃げられないだろうとも判断したのかね。全くそのとおりだよ。

地面に横たえ、丸くなっていた身体を糸で引き起こされる。…便利な糸ですね。どうやって動かしてんだらう、それ。

一方で地面へ伸びたいくつもの糸がぐさっと土の中に突き刺さり、奥へ進んでいく。そしてあつという間に、何かを滴らせながら私の口元に近づいてきた。滴つているもの。鉄分がかなり多そうな赤褐色をした、それは水の様だつた。

…背に腹は変えられまい。

ほら飲め飲め、と言わんばかりに田の前で揺らされる糸を、思い切つてパクッと口に含んだ。

不思議と味に鉄臭さはなくて、少し塩っぱくて、甘い水だつた。  
美味しい、美味しい。

ちゅーちゅー吸い上げ、次々と差し出される水を体の中に吸収する。飢えていた私は、もう夢中だつた。

どんなに頭で死ぬと諦めていても、身体は生きたがつていたようだ。それがなんだか無様で情けなくて、命を簡単に諦めたりして親に申し訳なくて、淋しくて、色んなものが内混ぜになり、涙が出て

く.....るのを押さえるため般若の顔を作る。

「おおおおおおおお！折角の水分を無駄にしてたまるか！一度と前の轍は踏まぬ！踏まぬぞおおおお！」

やることは限られている。考えなくては、生き延びる方法を。そして、家に帰る方法を見つけなくては。

朝です。

あれ？ 寒かつた筈なのにふわふわしててポカポカしてて、温かい……というより苦しくないか、これ。それに眩しい。うううう。パチッと目を覚ますと、岩山の間から太陽が昇つていました。ネイビーからオレンジイエローと綺麗にグラデーションしていく、見事なマジックアワー、もとい朝焼けです。

空気に昼間の砂っぽさがなく、澄んでいて、清涼感が半端ない。非常に気持ちのいい朝だ。

ラジオのノイズに混じり、体操の神様の声が聞こえるんだ。「さあ今朝もみんなで元気よく始めましょう、ラジオ体操第一～つ！」いま体操せずしていつ体操すればよいというのだ、日本人ならば。元々はアメリカの保険会社が始めたことらしいけど、そんなの全然気にしてない！

…………と思つたまではよかつたのですが。動けません。身体中に糸が巻き付けられています。

どうやら私は、繭の一部となつているようです。地表から離れ、かなり高い位置に糸で縛られています。

「〇二……」

そういうた趣味はないのですけれど、何かに目覚めそうな。この抵抗し難さがまたなんとも……冗談です、ごめんなさい。

びくともしない糸の強度に感心しつつ、なんとか首をひねつて超巨大繭の様子をうかがつた。

とりあえず、繭に摄取口らしきものは見当たらない。糸を触手の

よつに操るから、変態中でも何か食べるのかと思つたよ。

暫らくは食われる心配がなさそうだけど、問題は変態を終えた後だなあ。ひひ、怖や怖や。どんな怪獣が待ち受けているやう。

逃げるとしたら、この繭の中でサナギから羽化した直後になるかな。私は理科の授業の実験で育てた蚕を思い出した。

蚕は繭の中にサナギがある。サナギから羽化した蚕の成虫は、30～40分くらいかけて繭を溶かしながら出ててくる。その時点ではまだ元気に動き回ることができなくて、繭から出たあと羽が固まるのに更に30～40分程かかるのだ。

蚕の変態がこの巨大芋虫にも当てはまるとするならば、蚕の何倍も何倍も何倍も身体が大きいから、羽化して繭から出て動けるようになるまでは相当な時間が掛かって、無防備なはずなのだ。…想像では。うむ、無理やり感が否めないけれど。

繭から突き出るとき、私を縛り付けてる糸の部分も上に近いため多少なり緩むかもしない。それならチャンスは繭から出た直後じゃないか。落とされないように注意もしないといけない。

… そう易々といくかは疑問だけれども、それつきやないんだよね思い浮かぶ方法が。私お馬鹿だし。

とりあえず中が見えない分、音とか、繭の様子とか、観察はこじめにしないと。

… そういうえば、何故か昨日は言葉が通じてたなあ。いっちょ話しあげてみるか。

「ねえ、綺麗な朝日だよね。そう思わないかい、旦那」

「グルル」

「……まさか返事が帰つてくるとは思にもよくなかったよ。サナギつて鳴くもんなんだね」

「グルル」

「……こりゃまた随分と特撮怪獣っぽいじゃなかつた、低い声になつたねえ」

「グウ」

「ははは……もしかして、変態は、もう終わりが近かつたりするの？」

「グルルル、グル」

「…………や、そこですか

……「とにかく終わつてこる。余計なエネルギーを使いたくないから休んでいるだけだ」、とな。じゃあもう蘭の中は完全体なんですね。動こうと思えば動けるわけですか。

いやは、いやは、いやは、いやは。

いつも自分の知識が現在に起つていてる事象に当て嵌まるとは限りませんよね。うん、真理だ。何が蚕だよ。こんな時役に立てなくて、いつ役立てるといつの理科の実験。蚕といつ金のなる財産を善意無償でくれることじまらず、育成アドバイスといつアフターケアまでしてくれた養蚕家のおじさんに謝らねば。

…………じゃなくて。ビルジョア。こりゃ逃げられる気がしない。ど

うしたものかなあ。うへん、うへへん。

相手は怪獣。かいじゅう。かいじゅう、か。

ん？待てよ、かいじゅう？そつだ！そつだよ！

逃げられないなら懐柔すればいいじゃない！幸い言葉は通じているし、話し掛けたら応えてくれる程度には嫌われてないみたいだし。懐柔だ懐柔！怪獣を懐柔だ！怪獣を懐柔だなんてよくそんな上手いこと思い付いたな私！

え？ それでもない？… ですよね。

## わかつたこと

懐柔ところの娘のおしゃべりを、私は芋虫様と続けていった。  
内容は自己紹介や他愛ない話、じじについて等、色々だ。そして  
得た情報がかなりある。

まず、私と出会った芋虫様視点を説明しよう。

私は、芋虫様がいつも餌にしている「ロックアント」というもの  
に間違えられていた。ロックアントとはこの戦場地域に住み、頭・  
胸・腹の間がくびれた六本足の焦げ茶色の生物で、芋虫様の大好物  
なのだ。やはり肉食なのですね。

芋虫様はサナギになるまで地中に潜り住んでいるため、目が悪く、  
パジャマの黒地と黒髪で、全体的に黒く見えたため間違えてしまつ  
ていたらしい。

その違いに気付いたのは逃げる私の声と動きで、ロックアント（  
いつも）と違う、こりゃ見たことない生物だと。ロックアントは危  
機を感じると直ぐ死んだフリをしてくれる、ちょっとと間抜けであり  
がたい種族らしい。鳴き声は「ギャア！」…悲鳴だよ。

珍しいし、とりあえず捕まえて玩具にして遊んでみるかと興味本  
位で追いかけ続けるが、なかなかどうして捕まらない。始めは楽し  
かつたがやがてそれにも飽き、仕方なく害のない粘液を使い（普段  
の狩りでは筋をも溶かす毒を使っているようです）、足を止めさせ  
る。そんなつもりはなかつたが転んで怪我をさせたようなので、血  
を舐めて治してやつていたら、意外に美味しいことが判明した。美味  
いが普段の餌と違うから食いたくはないなど悶々していたら、こん  
な時にやってきてしましましたと、待ちに待つたサナギ化（進化）  
が。

別に私を食べる気は芋虫様にならしく（定められた餌で無けれ

ば生理的にダメらしき)、オモチャを見つけたような心境であることが知れて、心底ホッとした。

ふー、やれやれ。それならそつと早く言つてくれればよかつたのにね。ヨダレの量＝食欲だとばかり思つてたからさ。

他にもまだあった。芋虫様は「ランドキングビー」という大陸に五体と居ない希少種のモンスターらしい。インセクター系では最強種で、知性もあり、完全体ともなれば数あるモンスターの中でもトップクラスのスピードを誇るのだなどと、自慢げに話された。ついでにオスだそうで。

……インセクター（昆虫）系？何じゃそりや、と首をかしげる私に、芋虫様改めランドキングビーさんは機嫌を損ねることなく、丁寧に教えてくれた。

インセクター（昆虫）の他にもドラゴン（竜・龍）、フィッシュ（魚）、プラント（植物）、ビースト（獣）の5つの系統に別れるモンスターがこの大陸にいるのだそう。

インセクターに特徴される固い外殻や六足や粘液を操る訳でもなし、ドラゴンやビーストのような鋭い牙や爪も持たず、フィッシュにしては陸地に平気だし、プラントのように栄養分を自給自足するわけでもない、私みたいなタイプ（ヒト）は見たことがないと。

聞きなれない単語の数々や状況に、いよいよ受け入れざるを得なくなってきた。

ここは、アメリカでもどこでもない。私の知つてゐる世界と常識も次元も違つ場所であることを。

果然だ。ここに来た経緯も分からぬし、モンスターばつかのこの大陸でどうやって協力者を見つけて帰りやいいんだか、見当もつかないんだから。

呆けていると、思い出したかのように股ぐらがむずむず疼いてきた。

……………こんな時でも整理現象は止められないらしいね。シリアスとは縁がなさそうで嬉しいやら、悲しいやら。ちなみに、まだ繩に縛りつけられたままです。

「あのー…」これ解いてくれないですかね

「グルル」

「うーん、何故ときますか。乙女に排泄だなんて言わせるつもりですかね、ランドの田那。いや、言つけども。

「おしつけです、排泄です」

「グルル」

「そりゃ私だつてするよ。生きてるんだし」

「グルルルル」

「えつ。」(1)でなんて無茶言わないでよ。無理だよ、恥ずかしすぎ  
るつて」

「グルル」

「そんな、許されても……逃げたりしないからお願ひします、  
解いてください——漏れる漏れる漏れるつて!」

「グ」

「ぎやああああ——なんで糸がパンツに……ちよつ、待つ、やだ  
やだやだやだ!乙女に何をするつもりだコンチクショ——つ——」

「グルッ」

「『補助』じゃねええええ——!——!」

ええ、ええ。ランドキングビーさんに私の羞恥心は伝わりません  
でしょうし、理解できないでしょうとも。ええ。いくら言葉が交わ  
せたつて人とモンスターですもんね。相互理解は難しいでしょう。  
え——結果と、してですね。排泄は、できました、けども。  
多くは語らまい。皆様のご想像にお任せします。もう忘れたいし、  
次が怖い。

これが食料としての運命から免れた、代償なのか……。

## モンスター・メモ その1（前書き）

インターバルです。

## モンスター・メモ その1

### ＜インセクター（昆虫）系＞

主に粘液を操ることができ、六足や固い外殻等を完成期の身体的特徴とするモンスターの系統。基本的に無自我であり、本能で行動する。同じ系統内で被食（食物連鎖下位）と補食（食物連鎖上位）の関係がある。プラント系やインセクター系を餌とする。

他モンスターと相対的にみると一撃はさほど強くない。しかし陸でのスピードは系統的に最も優れている。

例外としてランドキングビーなどがある。

### ＜ドラゴン（竜・龍）系＞

主に四足・二足、鋭い牙や爪、隙間なく身体を覆う鋼のような鱗などを身体的特徴とするモンスターの系統。炎や冰雪を吐いて操る。高い知能をもち、プライドが高いタイプが多い。フィッシュ系やビースト系を主食とする。インセクター系やプラント系も食べられない訳ではないが、不味い（と思っている）ため好んで食べない。

身体的特徴によりアタック力、ディフェンス力共に優れ、最強系統とされる。しかし、単にスピードのみ見るとビーストに劣つてしまう。繁殖力が弱く、個体数は圧倒的に少ない。

### ＜ビースト（獣）系＞

主に四足、鋭い牙や爪、長短な体毛を身体的特徴とするモンスターの系統。ドラゴンのように、炎や冰雪を吐く種もある。知能はあ

るが、好戦的で短気なタイプが多い。インセクター系と同じく、系統内で被食と補食の関係がある。フィッシュ系やインセクター系、ビースト系を好んで食べる。

身体を守るものが体毛しかないためティフェンスには劣るが、補食タイプのアタック力はドラゴン系に勝らずとも引けを取らない。系統全体の傾向としてスピードはインセクター系に次ぐ。ドラゴン系との因縁が深い。

#### ＜プラント（植物）系＞

主に自力で栄養分を作り出すことができることを特徴とするモンスターの系統。長く生きているものほど知能が高い。穏やかで大人しく、無害なタイプが多いため、よく被食に遭う。陸でも水中でも生息でき、移動可能。モンスターの餌は必要としないが、ある程度の日光と水、温度は必要。攻撃する力や防御する力、スピードまでない最弱種族であるが、繁殖力が圧倒的に優れ、数も多い。

#### ＜フィッシュ系＞

主に滑らかな鱗とヒレ、尾ヒレ、エラなどを身体的特徴とするモンスターの系統。水中に住みながらも陸に上がれる。しかしあがが多くの動きがかなり制限されるため、滅多なことでは陸に上がらない。自我はあるが、本能に忠実。臆病なタイプが多い。インセクター系やビースト系ら同じように、系統内で被食と補食の関係がある。主にプラント系やインセクター系、フィッシュ系を食糧にする。

強さはプラント系とそつ変わらないが、水中でのスピードは速い。また、極少数であるフィッシュ系の補食タイプには鋭い歯に強靭な頸があり、攻撃する力はビーストに並ぶ。



## ランド・キング・ビー

繭から降りしてくれた代わりに、私の腰には糸が巻き付けられた。ハーネスを付けられた犬の気持ちが分かる気がするぜ。ワンワン、わふわふつ。……ふう。

さて、どうしたものんかな。

生きていくため、帰るための何か手掛かりとなるものを見つけていくための協力者となるモンスターが欲しい。

第一候補は厚かましくも、目の前のランドキングビーさんだ。一番身近にいるモンスターで言葉も通じているし、餌として私を認識していない。それに強さも申し分ないと思われ、気に入られている限り身の危険はなさそうだ。

他はどうだらうかと、周りを見渡すと、ただの枯れ草だとさつきまで思っていたものが目に留まった。よく見れば、ちょいちょい動いているではありますぬか。

ふつふつふ。よーし、モンスターはつけーん。引き抜いて、土を振り落としてみる。えーっと、確か、プラント系になるのかな。キーキー鳴きながら、『ママみたいに小さい目のついた太い根っこが私の手の中で痛そうにじたばた藻搔く。円らな瞳が潤んで、私を見つめる。うわーーー！なんかゴメンなさいーゴメンね！葉っぱ持つたら痛いよね！？慌てて元の場所に戻し、優しく、優しく土を被せた。

「グルルル」

なるほど、この子は「サースティブレイド」というモンスターな

んですね。可愛い見た目に反してカッコいい名前だな…………って、あれ？

いま、IJの子の声はただの鳴き声だったのに、なんでランドキングビーさんの声は言葉として分かるんだろうか。

……?????????

ぐりゅりゅりゅーーーーーーーー。

「おっ、腹からスゴい音が出た。そういうえば口にしたのは水だけで、固形物を食べてないな。お腹すいた…」

口に出してしまっていたようで、ランドキングビーさんの糸が地面に突き刺さって、例の褐色の水をすすめてきた。うーん、生きるために貰うけども、私でも食べられそうな固形物つてないのでしょうか。

……荒野にはなさそうだなあ。森とかだったら、なんかありそうなのに。

うーん、弱つた。私に発言権は認められているようだけど、主権はないのだよ。主権は、ランドキングビーさんのお心次第なのだよ…。下手におねだりして機嫌を損ねさせてしまったら怖いんだよね。気紛れに分けて貰っている水で生きている状況だし、今ここで見放されると正直、私の身は絶望的だ。

ここは我慢しかなーいか…。まあ人間、食べ物が無くても水があれば一月は生きていけるってよく聞くし、むしろ食べ物でなく水がある今の状況に感謝しなくちゃいけないんだよね。

あああああー！そいいえば、まだちゃんとランドキングビーさんにお礼を言つてなかつた！

日本人たるもの、挨拶感謝は常日頃から心掛けねばならんというに！何たる失態か！

「くり、と最後に水を飲み込んで、私はランドキングビーさんに笑顔を向けた。

「お水ありがとうございます、ラバーデキングジーさん! 本当にありがとうございます!」

え？

何かが破裂するような凄まじい音がしたかと思うと、一瞬の内に土埃があたり一面に広がり、何も見えなくなつた。

や 一 体 ! 何 が 起 き た ! !

慌てながら、赤ちゃんのはいはいで現在の状況確認を……ん？

とりあえず触つてみる。真っ黒でカチンコチンに固く、節搏立つてて、ギザギザしている。鍋で食べたタラバガニを思い出した。

「グルル」

フルネームで名前を呼ばれた。山田花子、それは私の名前である。ゆつくり目線を上げていく。

鋭い針を先端に、黄と黒が交差する腹部。黒曜石のように硬そうで艶やかな胸部には、さらに四肢が付く。四肢の上二つは鋭利な鎌状になつてあり、殺傷能力が高そう。大きく広げられた翅は厚いのに透き通つて、そして明らかになる全貌。

蜂だった。

スズメバチ。人間サイズのスズメバチ。その頂には、豪奢で纖細

な造りをした金の王冠が眩しい程に光り輝く。

……ランド（陸）、キング（王）、ビー（蜂）とな。  
ランドキングビーさんの名前を、この時になつて私はよつやく理解したのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8361z/>

---

花子とモンスターズ

2011年12月31日21時49分発行